

# 札幌市中小企業振興審議会

## 会 議 録

日時：平成22年3月30日（火）

場所：STV北2条ビル6階 第2～3号会議室

## 1. 開会

事務局（角田経済企画課長） それでは定刻となりましたので、ただいまより札幌市中小企業振興審議会を開催させていただきたいと思っております。私は、経済局産業振興部経済企画課長の角田でございます。よろしくお願いいたします。大変恐縮ではございますが、座って進めさせていただきたいと思っております。

委員の方でございますが、本日は16名の委員の方にご出席をいただいております。なお、大味委員、大谷委員、水澤委員、につきましては、本日所用のため、欠席とのご連絡をいただいております。

次に、お手元の資料の確認でございますけれども、本日は事前に皆様にお送りいたしました資料を使って、ご審議いただきたく思っております。資料は2つございまして、「札幌市産業振興ビジョンの全体構成(案)」、それから「札幌市産業振興ビジョン(案)」という2つの資料がございます。お手元の資料が足りない方がいらっしゃいましたら、お知らせいただきたく思いますが、いらっしゃいますでしょうか。

それでは、これより後の議事運営につきましては、小林会長の方をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 2. 議事

小林会長 それでは、早速、議事に入らせていただきます。

本日の議題は、「札幌市産業振興ビジョン」の素案について、となっております。

まず、事務局の方から説明をお願いします。

皆様からのご意見、ご質問につきましては、説明が終了した後にお受けしたいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。

事務局（角田経済企画課長） それでは、私の方から簡単に15分か20分程度でこの案につきましてご説明をさせていただきたいと思っております。

まず、お手元の「札幌市産業振興ビジョンの全体構成(案)」の方でございますが、これまでいろいろと審議いただきまして、その後いろいろな方からご意見をいただきまして、こういった構成案に現在まとめております。第1章から第5章までということで、第1章 ビジョンの基本的な考え方、第2章 札幌市産業の現状と課題、第3章 札幌市産業の目指す姿、第4章 産業振興施策の展開、第5章 ビジョンの運用体制というふうに全体構成を案として考えているところでございます。

それでは、実際の具体的な産業振興ビジョンの素案につきまして、簡単にポイントをご説明させていただきたいと思っております。

お手元の「札幌市産業振興ビジョン(案)」という資料2でございますけれども、そちらの32ページからご説明をさせていただきたいと思っております。第1章、第2章につきましては従前と特に大きく変わっておりません。第1章 ビジョンの基本的な考え方、そして第2章はこれまで皆さんにいろいろご審議いただきました札幌市・北海道経済の現状と課題について

の分析でございまして、第3章から今後札幌市が市民の皆様や企業の皆様とどういう形で産業振興を図っていくのかという、今後のビジョンを具体的に示したのが第3章・第4章でございます。

32 ページから 35 ページまでの第3章でございますけれども、札幌市産業の目指す姿ということで、ここでは具体的に市民の皆様にわかりやすく、この10年間札幌市がどのようなことを目指して産業振興を図っていくのかということをもとめさせていただいたつもりです。上のところに標題がございまして「人の活力と地域の魅力が創り出すチャレンジ都市さっぽろ」、事務局といたしましては、産業振興ビジョンのいわゆるサブタイトル、副題とさせていただきたいと思っております。人材や地域資源の魅力を十分に活かし、そして創意工夫による新たな産業の創出を目指す、そして常に挑戦・チャレンジし続ける理念を共有した上で、行政と市民と企業の皆様が一丸となって産業振興に取り組むという思いを込めてこのサブタイトルをご提案させていただいております。

それから、2つ目の「札幌市産業の目指す姿」ということで、具体的に5つの姿をここでご提示させていただいております。1つ目が「中小企業の活気があふれ新しい時代を先導するまち「さっぽろ」」という姿でございます。これは札幌市内の従業員数、事業所数ともに9割以上を占めます中小企業の振興・成長なくして札幌経済の成長はないということで、やはり中小企業の活気があふれる、そういったまちを目指していきたいということでございます。

33 ページに移りまして 2つ目が「地域資源を活かした創造性あふれるまち「さっぽろ」」ということで、これは北海道、札幌の優位性や独創性、独自性を活かして創造あふれるまち「さっぽろ」を目指していきたいということでございます。

それから3つ目が「世界に羽ばたく企業が躍進する活力あふれるまち「さっぽろ」」ということで、人口減少によって国内市場の縮小がこれから進んでいくだろう、そういった中でやはり海外に目を向けてグローバル化に対応していかなければいけない。そういった点で企業あるいは行政、それぞれ単体ではなくやはり産学官といった連携をしながらグローバル化に対応して世界に羽ばたいていく企業が札幌に育っていく、そういう姿を目指していきたいと考えております。

それから4つ目、「人と企業が世界中から集まる魅力的なまち「さっぽろ」」ということで、これは前回もいろいろ議論していただきましたが、人材の道外への流出を抑制する、あるいは逆に人材を外から誘致する、それから企業誘致ということで、人と企業が札幌に集まってくる、そんなまちを目指したいと思っております。

最後に「個性的なまちづくりと産業が結びつき地域が賑わうまち「さっぽろ」」ということで、地域の活性化が、経済活性化につながる。例えば、地域コミュニティの形成の中で、ソーシャル・ビジネスとかコミュニティ・ビジネスといったものを育成していくことで、地域の活力があふれるまちを目指したいと考えております。

それから 35 ページですが、そういった札幌の10年後の姿をイメージしつつ最終的な目

標としましては、まず雇用の場の確保・創造、そして企業・就業者の収入増加、こういったことから、最終的には、前回までは並列させていただいていたのですが、札幌市の財政状況の好転、税源の涵養ということを示させていただいて、そういったことから魅力ある札幌のまちづくりをおこなっていききたいということを最終的な目標に明示させていただきたいと思っております。

以上が第3章の目指す姿でございます、ではその目指す姿に向かって、具体的にどうということを取り組んでいくかということ、第4章以下で書かせていただいております。

38ページをお開きいただきたいと思っております。具体的なことにつきましては、38ページの表をご覧くださいながら簡単にご説明させていただきたいと思っております。まず、基本理念といたしましては、先ほどのサブタイトル「人の活力と地域の魅力が創り出すチャレンジ都市さっぽろ」ということで、いまご説明いたしました基本理念に基づいて、5つの目指す姿をここでまず明確にお示ししております。こういった10年後の札幌の目指す姿を見ながら、視点としては、これまでもご議論いただいている通り、「道内経済循環の拡大」そして「道外需要の開拓」という、いわゆる北海道内つまり域内、それから域外の需要の拡大・開拓というこの2つの視点をもとに、具体的に施策を展開していききたいと考えております。その施策の方向性として大きく3つに分けて考えております。

1つ目が「社会情勢の変化への対応」で、これは好むと好まざるとにかかわらず、どんどん進んでいく社会情勢にどう対応していくか、そして2つ目が「北海道・札幌広域都市圏の強みの活用」ということで、まさにこれは北海道・札幌の優位性といったものをどうこれから産業振興に結び付けていくのか、そして3つ目が札幌市内の事業者の9割以上を占めます中小企業の経営基盤強化、これをなくして札幌の経済成長はありえない、ということ、この3つの分野に分けて、それぞれ具体的な施策を考えていききたいと思っております。私どもといたしましては極力抽象的ではなく、なるべく具体的に今後の施策の方向性をここで明記させていただいたつもりでおります。さて、一方でこれはあくまでもビジョンでございますので、この中であまり具体的な事業ですとか数値目標となりますと、ビジョンという大きな方向性という意味では、あまりにも具体的すぎると考えております、やはり施策の方向性を具体的にするとということで書かせていただいております。

まず、「社会情勢の変化への対応」ということで4つ挙げておりますが、1つ目「人口減少による市場・経済規模縮小への対応」ということで、これは人口減少によって二つの側面がございます、消費者の減少、それから労働力の減少といったことがございます。消費者の減少ということにつきましては、企業の新分野進出、新規市場の開拓を促進していく。それから労働力の減少ということにつきましては、やはり企業誘致、あるいはUターン・Iターン、二地域居住といった施策を進めていききたいと考えております。それから札幌市は、他の政令指定都市よりも女性の人口比率が高いのですが、女性の潜在的労働力の活用や、高齢化をマイナスの側面ではなくプラスの側面できちんと捉えて、経験豊富な高齢な方の働く場をこれからどんどん促進していききたいと考えております。

それから2つ目に、「高齢化と健康意識の高まり」ということへの対応でございます。これから高齢化がどんどん進んでいく中で、当然いろいろ需要が増えてくる、その一つが、健康・福祉関連サービス産業の振興です。高齢者の方が増えてきますと、そういった方に色々な器具などが必要になるということで、ものづくり産業というものを、高齢化・健康への関心の高まりといったなかで振興を図っていくというものです。それからもうひとつ、高齢化・少子化といった中で、地域コミュニティが非常に重要な役割を果たすであろうと考えております。地域の中で安心・安全に暮らせる、そしてその中で商店街の振興とか、それから地域社会での生活関連サービス産業といったようなものを振興していく必要があるのではないかというふうに考えております。

それから3つ目、「グローバル化への対応」でございます。これはボーダレス社会といわれまして「ヒト・モノ・カネ・技術・情報」といものが国境と関係なくどんどん進んでいく、そういった中で当然グローバルな視点での戦略の構築が求められるということで、やはり北海道・札幌の地理的優位性を考えますと、たとえば海外との関係でいきますと、世界に誇る積雪寒冷地技術、それから北海道の食の強みといったものを活かして、近隣諸国との経済交流、そういった中で海外進出を促進していく、また、エリアとしましてアジアあるいはロシアといった地理的優位性を活かして、そういった地域との貿易を促進していく必要があると考えております。さらに、ネットワークという観点から外国人観光客の誘致、それから、アジアと道内企業との架け橋となる人材をきちんと育成をして、それでアジアと北海道・札幌の経済交流を進めるうえでの必要な人材を育成していく、そういった観点が必要かと思っております。

そして4つ目が「地球環境問題への対応」ということで、これは従来の化石燃料エネルギーに依存した社会から、いわゆる再生可能エネルギー、いわゆる低炭素社会への移行ということで、あらゆる社会・地域でもそういったことが求められると思います。そういった中で北海道・札幌が地理的な優位性、強みを活かすとすれば、たとえば北海道の自然環境の中でのバイオマスエネルギーですとか、あるいは、先ほど少し申し上げました寒冷地技術、これは高密度住宅・高气密住宅・高断熱住宅といったものが環境産業としてやはりこれから振興していく必要がある。それから北海道の強みといたしましては、食の副産物あるいは廃棄物の利活用による環境関連産業の振興、そういったようなことを進めていきたいと考えております。

それから、2つ目「北海道・札幌広域都市圏の強みの活用」という部分でございますけれども、1つ目はやはりなんといっても「豊富な北海道の食資源」を活用して産業振興を図る必要があると考えております。そういった中で6次産業の推進、いわゆる第1次、第2次、第3次がひとつに繋がって、それぞれの産業の底上げをしていくことを挙げております。従来議論されております通り、例えば、たらこが福岡に行って明太子になって、またこちらに戻ってきて高く売られる、いわゆる付加価値を北海道で高めていないという現状の中で、やはり高付加価値化というのが食の分野では非常に求められることですので、

高付加価値化というのを今後進めていきたいと考えております。それから道内人口の1/3を占める札幌市民が北海道のものを食べる、あるいは利用する、いわゆる地産地消の推進や、海外・道外への販路拡大といったことをこれからもっと進めていきたいと考えております。また、市民や企業の参加による札幌らしい都市型農業、広域連携による農業の振興といったものを今後進めていく必要があると考えております。

それから2つ目は、食ともうひとつ大きな強みと考えております観光でございます。やはり北海道の雄大な自然環境というのは非常に大きな観光資源となっていると思います。そういった中で札幌のポジションというのは単に自然だけでなく、今まさにいろいろと進められておりますけれども、例えば駅前地下歩行空間ですとか、新幹線の延伸、路面電車の延伸、こういったことを考えていきますと、都心の顔がひとつの観光資源になるのではないかと考えております。ですから北海道の雄大な自然と、いわゆる札幌の都心部の融合が大きな観光資源になるというふうにわれわれは捉えております。そういった中で札幌と道内市町村との連携、札幌にあるものないもの、道内市町村にあるものないもの、それぞれ、観光資源を補完しながら観光振興を図っていく。あるいは、近隣諸国、とくにアジア・ロシアといった国々をターゲットとした観光プロモーションや、体験型、例えばニューツーリズムと言われていますが、ヘルスツーリズム、スポーツツーリズム、アグリツーリズムといった従来にはない新たな切り口の観光振興を進めていく必要があります。それから、MICE とよく言われますけれども、コンベンションですとかインセンティブツアーとか、そういったような大規模会議、それから富裕層の誘客といったものをどんどん進めていく、それから、そういったことを通じて市民自らが札幌・北海道の良さをきちんと理解をして、いわゆる郷土愛、自分達の地域を愛し、自分達のイベントですとか観光資源を再度皆で認識し合いながら、市民一人一人が観光大使となる、そういったことで観光振興を図っていく必要があるのではないかと考えております。

それから3つ目がスポーツですけれども、札幌ドームでのプロ野球やサッカーですとか、もちろんバスケットボール、アイスホッケー等、いろんなプロスポーツなどをみるスポーツ、それから先ほどの高齢化といった中で、いわゆる、健康のためにするスポーツがありますので、みるスポーツ・するスポーツ両側面から産業振興を図ることができるのではないかと考えております。当然プロスポーツ観戦によって消費行動は拡大されますし、あるいは、健康づくりと例えば食関連、からだに良いサプリメントとか、そういった健康づくりとスポーツの融合といったものがひとつの産業振興になるのではないかと考えております。

それから、4つ目が「世界に誇れる文化芸術」ということで、これは北海道・札幌には世界に誇れる PMF といい教育音楽祭ですとか、Kitara ホール、あるいは最近始まりましたシティ・ジャズといった、そういうものをもっと活用して産業振興を図っていきたいと考えております。あるいは、札幌、歴史がないまちと言われますけれども、その分市民の独創性とか自由な発想、そういったものを創造性、創造都市といっていますが、創造性を新たな文化産業の創出に繋げていきたいというふうと考えております。

それから、「積雪寒冷地技術及び教育機関等の活用」ということで、これはまさに先ほどからお話しさせていただいておりますが、世界に誇る積雪寒冷地技術を新たな分野開拓あるいは海外への開拓により、さらに振興していきたいと考えております。やはり北海道中の札幌は知の集積地と言われておりますが、そういった中で産学官の連携によって、こういったものを活用してさらに産業振興を図っていく必要あると考えております。

それからバイオテクノロジー、これも先ほどもご説明させていただきましたが、北海道の食・自然を活用したバイオテクノロジー、たとえば、機能性食品あるいは化粧品それから医療の分野、そういったようなことをさらに振興していきたいと考えております。

それから、IT、これもやはり北海道らしさのひとつのポイントになるのではないかと思いますけれども、下請け構造からの脱却が大きな目標というふうに言われておりますが、そういった中で協業化など連携を図っていく中で、IT をさらに推進していく、あるいは、例えば、現在クラウド化によって、データセンターというものが全国で誘致が進められておりますけれども、北海道の場合は、冷涼な気候がデータセンターの省エネルギーにつながり、環境にやさしいITを実現するというので、このような北海道の強みを活かして進めていきたいと思っております。

それから、最後にコンテンツでございますけれども、これは先ほど申しあげました、いわゆる市民の独創性あるいは札幌らしさ、そういったものをコンテンツ産業育成のための人材育成、あるいは、コンテンツのデザインを活用したパッケージと食品の融合、このようなことでデザインをはじめとするコンテンツ産業の振興というものが、産業振興につながっていくことになると思っております。

それから、3つ目の「中小企業の経営基盤強化」ということで、「中小企業を支える人材育成の推進」、いわゆる人づくりを進めることを挙げております。

それから「多様な人材の確保に向けた取組」、これは、例えばIターン・Uターンですとか二地域居住、先ほど申しあげました女性の活躍の場の創出、それから働きたい人と働く場のミスマッチの解消をこれから進めていきたいと考えております。

それから、「中小企業が利用しやすい融資制度の充実」ですが、現在、札幌市の融資制度がございますけれども、これをさらに充実させていきたいと考えております。

また、「経営アドバイスや創業支援の充実」といったことで、中小企業の基盤強化を進めていきたいと考えております。

最終的に 66 ページがこのビジョンの結論と位置付けておまして、これまで基本理念、目指す姿、視点、そして施策の方向性を述べてきましたが、今後 10 年間札幌はどうするかということを一言でまとめたのが、この 66 ページでございます。3つのエンジンとして、前回の審議会でご議論いただきましたエンジンという言葉で表しておりますけれども、「食」・「観光」、そして前回はなかったのですが「環境」というエンジンを加えさせていただきました。やはり、これから環境という分野で、10 年間産業振興を図っていく必要があると考えております。これらは、北海道・札幌の当然あるべき姿であり、また優位性でも

あるので、これらの分野の産業振興が必要であろうということで、この3つのエンジンを吹かすことによって、当然関連する全ての産業の底上げといえますか、活性化が図られると考えております。これは第1次・第2次・第3次全ての分野に関連すると考えております。そういった中で、これまでもご議論いただきましたけれども、基盤として札幌型ものづくり産業ということで、従来、第3次産業中心の経済構造と言われておりまして、これまでも活性化するためのさまざまな振興策を、企業・行政・市民の皆さんと一緒にやって行ってきましたが、今まで弱いと言われております、ものづくりは裾野といえますか、連関する産業が非常に多岐にわたっておりますので、ものづくりをこれからいっそう基盤強化していくことが必要であると考えております。その際のものづくりというイメージは、どうしても機械・金属といったイメージになりがちでございますが、機械・金属に加え、札幌型としてはバイオ・IT・コンテンツといったものを札幌型ものづくり産業と位置付けまして、これを基盤に3つのエンジンを吹かして行って、これから10年間の札幌の経済振興、そして、北海道を引っ張っていくということを66ページにまとめさせていただいたところでございます。

68ページは運用体制ということで、これまでもご議論いただきました、やはり進行管理が重要ということで、審議会をはじめ、さまざまな方々からのご意見をいただきながら、これを適宜見直し、必要があれば修正を図っていくということを挙げております。

以上、簡単でございますが、このビジョン素案の概要でございます。よろしくお願いたします。

小林会長 ありがとうございます。それでは、ただいま事務局から説明がありました内容につきまして、ご意見・ご質問をお聞かせいただきたいと思っております。何かございませんでしょうか。

三箇委員 観光ですとか環境ですとかいろいろ出てきています、それと食の問題ですね。これについて札幌市の各部局との関連性というのはどういう状況になっているのですか。

小林会長 いかがですか。

事務局（角田経済企画課長） この素案を作るに当たりまして、各部局と議論をしております。実は観光の方も、産業振興ビジョンに基づいて今後具体的な戦略を作っていくなければいけないと考えておりまして、そういったことでビジョンに基づいて具体的な戦略をこれから考えていくことになっております。あるいは環境の分野におきまして、これも議論しておりまして、現在行っている環境政策に加え、新たな分野を進めていくことによって産業振興を図っていくということで、環境部門のセクションと私どもの中では議論させていただいて、同じような考え方になっております。

三箇委員 はい、わかりました。

小林会長 他にないでしょうか。

三神委員 関連して、関係した局がこのビジョンの中でたくさん出ているのですね。そ

の局自体でやはりアクションプランを作って、5年なら5年間のアクションプランを作って、10年なら10年でもいいですが、そういうものをやはり明示しなければ具体的にならないと思うのです。それが結果的には予算編成などに活用されて、具体的になってくれたらと思うので、そういうところはどうかですか。そういうふうに進めてもらったらいいと思うのですが。いかがですか。

小林会長 どうですか。

事務局（渡辺産業振興部長） おっしゃるとおり、アクションプランは、非常に重要なことだと思っております。たとえば観光文化局の方では観光に関するアクションプランに向けた取組を来年度進めたいということでございます。そういった動きをわれわれとしても働き掛けていきたいと思っています。また、新まちづくり計画など、4年ないし5年計画の全庁的な計画策定というものも次のステージで動き出すということも想定されますから、そういったものも動き出しましたら、ビジョンとそれらのものを連動させて、全庁的な取組としてまとめていきたいと思っております。

三神委員 せっかく各局が全部関連しているというか、連携しているという話も当初からしているのですから、その辺りを具体的にしていかなければいけないだろうと思います。それから、さらに質問してもよろしいですか。

小林会長 どうぞ。

三神委員 38 ページの施策展開の方向性、中長期的な取組の施策展開の図表の中で、札幌広域都市圏の強みの活用に関連すると思えますけれども、この中で卸とか小売業というのは札幌では多く、かつ潤滑油のような役割を果たしていると思うのです。それが見えない形というのはその業種の方々に対すると、少し失礼じゃないかと思うのです。商店街のことは文章の中で少し出ていますけれども、図表の中でその役割をどう果たしていくかというような表現がやはり必要ではないかなと感じたことがひとつあります。それから、やはり、66 ページの「札幌市経済をけん引する3つのエンジン」と「札幌型ものづくり産業」というものをドッキングした図形になっていて、3つのエンジンに環境を入れたことは、これからの時代、環境産業が一番伸びるだろうと思われるので大変良いと思うのですが、ものづくりだけでこの3つのエンジンを吹かせるのか、それと関連するのか。何かここに集約をして、何とかものづくりを活かそうとする気持ちはわかるのですが、これは他の産業との関連が、具体的な一点に集中するということになれば、この図形は問題があるのではないかと思います。いろいろと考えていただいたのだろうと思うのですが、逆に分離してしまって図形のことを考えるか、何か疑問に感じるのです。市役所の皆様のご意見をお聞きしたいなというのがあります。

それから、文章の中では、連携や連動という言葉がたくさん出てくるのですが、農商工連携という形は、ずいぶん経済産業省が推奨して進めております。結局、今の卸と小売とも同じような感じがするのですが、こういう新しい動きの形を、これからの10年間の長いビジョンを作るわけですから、もっと表現するような工夫をしてもらったほうが良いので

はないかなと思います。実際には、経済産業省の北海道 100 選というもので連携が出ておりまして、実績が出ているわけですから、こういうようなものをやはり札幌市も一緒になって行つとか、予算を付けて行っていくというような形の力強さが必要ではないかなと思いました。以上です。

小林会長 3つほど問題提起されていますが、いかがですか。

事務局（渡辺産業振興部長） まず 38 ページにございます図の中で、卸小売業のしるしが置けないだろうかという話でございましたが、最初に角田課長の方から説明させていただきましてとおり、施策展開の方向性につきましては、具体的な事業名につきましては、あえて 10 年間という長いスパンの中の話でございましたので、記載しないような形でまとめさせていただいてございます。確かに卸小売業というのは、非常に重要な役割になっているということの認識ももちろんございますので、記載の仕方、方向につきましては検討させていただきたいと思っております。それから 66 ページの図でございますが、確かに三神委員ご指摘のとおり、この 3 つのエンジンとものづくりという基盤との整合性に関しましては、われわれも非常に悩みながら、その図をまとめていったところでございます。3 つのエンジンを重要な役割を担う装置だというふうにわれわれは考えているところではございますけれども、いずれにいたしましても、図につきましては色々な意見が出てございますので、検討させていただきたいと思っております。それから、農商工連携の話ですが、農商工連携の取組につきましては、われわれも非常に重要だと思っております。本年度の予算につきましても農商工連携ファンドというものを、北海道あるいは中小企業基盤整備機構とともに設立をしているという状況もありますので、書き込みの仕方について検討させていただきたいと思っております。47 ページのところには、それに関連した書き込みをさせていただいているのですけれども、今申し上げましたように、よりわかりやすく書かせていただきたいと思います。以上でございます。

小林会長 ほかに、いかがでしょうか。

山下委員 今 三神さんがおっしゃったところがどうしてもイメージがつかないのですが、例えば 66 ページのエンジンのところがどうしても違和感があるのです。ご説明聞いていると総花的に行うのだなという感じがしています。今までの経過とか、客観的に見たところ自体を評価して、もう一回確かめた課題で落とし込んだことで、最後ここにまとまっているのではないのでしょうか。何で違和感があるかと言うと、エンジンといいながらこの 3 つには具体性が何もなくて、結局ビジョンがあって、最終的に選択と集中の中で、ものづくりを振興するという形なのですけど、これの具体策もまたないのですね。ですから、生活だとか暮らしだとか魅力といったところ自体、食と観光と環境のところにもっていくのですが、ものづくりのところは雇用と経済活性化なのですよね。そこが基盤だと思うのですけども、どうもイメージがつかないのです。もしエンジンだというならば、食と観光と環境自体からどうやってエンジンを動かしていくのかというところを落とさないといけないのだけれども、目的と手段のところ、これでは難しいなという感じがしているから、

歯切れが悪かったのではないかなという感じがします。それから、今までも卸ですとか小売の関係自体をどうするかということと、その中でも、エンジンである前回言っていたものづくりが基盤といった形になったのですが、IT・コンテンツ・バイオというものは、検討会を1回やっているのですが、落としづらいところがあるのですよね。もう少し具体策を作っていきたいのですが、是非とも、先ほど三神さんがおっしゃってくれたアクションプランを作っていって、検証していかないと、結果的には5年経っても、10年経っても、変わらないのではないのでしょうか。実は、食と観光というものは10年も20年も、ずっと言っていることなのです。だから、検証のところ自体でどうも終わってしまっているような気がするのと、具体策をどういう形でしますかというところを、是非とも形にしていたきたいというか、期限を切って行っていただきたいなと思うのですが。

小林会長 いかがですか。

事務局（井上経済局長） 経済局長の井上でございます。今いろいろとご議論いただきまして、なるほどと思って聞いておりました。まず、これはビジョンということでございますから、これをもとに、今ご意見いただいていますように、アクションプランを当然しっかり作っていかねばならないと思っております。一つは今審議をお願いをしています、ものづくり振興戦略でございます。それから、観光の方は、新年度から新しいセクションもできまして、観光に関するアクションプランを作っていく方向性になっております。もう一つは、シティプロモート戦略です。これも来年度に約1億円の予算がつきまして、シティプロモートの手法を考えてまいります。これがおそらく12月ぐらいに3つ出そろった形になりますので、そのもとになるのが、現在ご議論していただいております産業振興ビジョンであると考えております。したがって、その3つが出てくればもう少し具体的にわかりやすいものになろうかなというふうに思っております。

それから、確かに3つのエンジンにつきましては内部でも議論がございます。このところはもう少し、内部的にも検討したいとは思いますが、簡単に言えば、けん引する産業の分野としては、食と観光と環境であり、そこをどのような形で高度化していくのかという部分が重要で、そこがいわゆる高付加価値化という方向性だろうと思うのです。したがって、もう少しわかりやすくピンとくるように検討したいと思っておりますところでございますが、方向としては食にしる、観光にしる、環境にしる、いかに付加価値を高めるかという問題になりますので、そのところを札幌型ものづくり産業という形で括ることについては、だいたい合っているのではないかと考えております。その方向性で、もう少し内部議論も深めまして、表し方については考えたいと思っております。

それから、先ほど出ました卸小売の関係ですが、例えば域内循環とか外需開拓ですけれども、本来ここを担うのは、実は卸小売なのです。これまでは、北海道内のものを札幌に持ってきて、それを北海道内に販売する方向で行っていたのです。今度は北海道の製造業とか、色々な業種と連携していただきながら、卸小売の方が逆に本州に、道外、国外に、売っていくというバージョンに変えていかなければなりませんし、その記述をもう少し

付け加えたらいいかなと、今お話を聞いて思ったので、そのところももう少し検討させていただきます。

小林会長 どうぞ。

清水委員 この審議会で4回審議しているわけですので、先ほど三神さんがおっしゃったとおり、期待度としては、もうアクションプランのたたき台が出来あがってほしい、というのが一つと、それからもう一つは38ページとそれから66ページのアクションプランをお作りいただく時に、是非もう一度整理をしていただきたい、というふうに思います。

やはり、66ページの図を拝見いたしますと、確かにエンジンとしては、おっしゃるとおりなんですけど、トヨタがあんなことになりましたので、あまり使いたくない言葉ですけども、この3つは、同じようなエンジン3つではなくて機能の異なるエンジンがそれぞれ3つあるのですよ。もしかすると、もう一つ増えるかもしれない、これ以上増やしたくないですけど、つまりは牽引する3つのエンジンというよりも、ここまできたら、ハイブリッド型という形で整理をしていただきたい。そしてその下に、今申し上げた通り38ページとの整合性をとっていただいて、アクションプランを作っていたいただきたいと思います。当然その中には卸についても出てくると思います。前回の審議会でも随分お話が出たと思いますし、それについては、もうプランが出てきてほしい、出てこなければおかしいというところまで来ているのではないかと思います。いかがですか平本先生。

平本委員 66ページの図に関しましては、事前にご説明いただいた時も、上の3つのエンジンとそれから下のものづくりとの関連性が、どのようになるかということをもう少し見えるような図にすることが必要ではないかということをご意見として申し上げておりました。ただ、何と申しましょうか、ものづくりというと、後ほど簡単にご報告いたしますけれども、ものづくりという言葉が持っている意義は受け手によってだいぶ異なっているのです。そのせいもあって、ものづくりという言葉が独り歩きしている面があるような気がするのですが、ここで言っていることは、むしろ付加価値を高める、そのことによって札幌を中心とした経済を活性化して暮らしやすいまちを作る。そういうことでありまして、高付加価値化ということがここでのキーワードなのだと思うのです。冒頭角田さんの方から明太子のお話がありましたけど、まさにあの例がそうでありまして、いかにして振興対象となる3つのエンジンに対して付加価値を付けられるような施策を展開していくのかということが、おそらくはポイントになっていくのだと思うのです。その中で雇用創出なども大きいし、それから付加価値が比較的作りやすいところがものづくり産業なのだという認識で、こういう絵になっているというのは私の理解であります。ただ、あるいは、今、清水さんがおっしゃるように、じゃあアクションプランを、そろそろたたき台をと言われますと、実は検討会のメンバーといたしましては、非常に、どうしようと思うのですが、イメージとしてはそういうイメージだということで、実は、第1回の検討会議でようやく考え方のベクトルが合ったというのが現状でございます。

清水委員 わかりました。

小林会長 よろしいですか。

平野委員 すいません、わたしも検討会のメンバーなんですけど、今この図を拝見いたしましたして、いかにもこの4つが並列的になっているのですが、もう少し有機的に結びつかないといけないと思います。例えば、実際に現在の札幌のコンテンツ産業は進んではいるといっても、アニメとかキャラクターとか、そういうようなのが多いですよ。それを実際の製造業とどのように機能的に結びつくのかというようなところが、まず全然ないので。それをここで示せというのが無理なのかもしれませんが、もう少し具体的に絵を出さないと、実際に、札幌はこれでいく、札幌型ですと言われても、ただ、その辺りにある製造業や、IT・コンテンツという、今はやりのものをただ結び付けている、ただ出しているように思われぬように、もう少し具体的な何かを出していただきたいと思います。それから、随所に高付加価値化とか、よく言われるのですが、例えば、観光客を呼ぼうとすれば、すぐ中国の富裕層と、世界中の人が言いたすような言葉を出しても、実際に富裕層を呼ぶならどうするのかというと、実際に呼んでいるところはすさまじい努力をされているわけです。例えば、中国へ行って、中国の製造業の作ったものを使って、それを逆に、観光客を大量に呼ぶというような具体的な努力をされているわけで、あまりきれいごとを並べないほうがいいと思うのです。これを拝見して、札幌というのはすごいなと思ったのは、何でも入っているのです。今回言われている言葉がみんな入っているのです。それだけ札幌というのは、逆に言えば、本当にミニ国家みたいなものだと思って、財源も少ないなかで生活保護費が1/8を占め、一般財源の1千億が生活保護費に回るといふすごい状況の中で、札幌市の方はこれだけのことを行っている。わたしは大変だなと思ったのですが、その中で具体的に何をしたいのかというのが、皆さんおっしゃっているところではあるのですが、やはり、何かアクセントをつけて引っ張っていかないと、結局終わってみれば、なんだかよくわからないな、というふうになりかねないなという懸念を感じました。

小林会長 他にいかがでしょうか。

三神委員 議論をしているうちに気がついたことなのですが、アクションプランから考えたら行政の役割というか、札幌市の役割はこれの中で表現されてないのですよね。ありますか。これは札幌市が作って、ビジョンとして発表する以上は、札幌市の役割というものを表現しておく必要があるのではないですか。札幌市が主催して、中小企業振興条例に基づいて開催している中小企業振興審議会の役割は表現できるのですが、ビジョンに対する札幌市の今後の役割というものを併記しておかないと、少し不安になりますね。なぜかと言うと、局長も部長もみんな転勤してしまうわけですよ、われわれだけ残るんですよ、担当のみなさんも2年、3年経つといなくなっちゃうんですよ。そういうことを考えると、やはり行政のほうも、これからの後輩が引き継いでこれをちゃんと実行しますよというような感じのものがないと不安だなと思うのです。それから各局のアクションプランについても、この産業振興施策の展開の中で、どこかで項目を入れないといけないと思うのです。

そういうことが必要であるかなと思いました。

小林会長 今の件につきましてはいかがですか。

事務局（井上経済局長） 人の入れ替わる件につきましては、そういう組織なものですから、そのところは信用していただくしかないと思っております。アクションプランの関係でございますけれども、産業振興ビジョンを作ろうと決めた段階では、経済局だけの動きということで動いておりました。しかし、産業振興ビジョンに取りかかり、いろいろな部局と協議をしていく中で、各部局も、市民に対する説明責任という意味でも、経済施策について、ひとつの方向性を示したものが必要であるとの共通認識を持つようになりました。

そこで、観光文化局のほうでも、産業振興ビジョンを作るのであれば、それに連動して、観光の分野についてのアクションプランを作っていこうという動きになっているのです。確かに、必ずこのビジョンの脇に、こういうアクションプランを作りますということ言えば、それはよいのですが、現在言えるのは、ものづくり振興戦略と観光のアクションプランということになります。しかし、対外的に、しっかり産業振興ビジョンの中で、全てのアクションプランについて書き込むという位置関係にはないので、そのところを、はっきり書き込むことは難しいなと思っております。私、もう1年おりますので勘弁していただきたいと思っております。

三神委員 だけど、その答弁ではちょっとだめですね。札幌市なのです。経済局ではないのであって、経済局が窓口としてこれを作成しているだけに過ぎないのです。札幌市全体が協力し合わなかったら、これは出来ないこと間違いないわけです。これは副市長なり、市長の責任であるわけですし、これは市長に答申した時にはっきり明記してもらいたい。応援しますよ、行って話をしますよ。会長に行ってもらってもいいですし。

事務局（井上経済局長） 今日はまだ素案の検討段階でございますけど、素案ができあがりましたら、企画調整会議という各局長が集まる市の内部会議に掛けた上で、当然、副市長、市長まで話が上がっていきます。その段階では、この産業振興ビジョンをベースに、次にどういう動きをするかを、市長、副市長に話をしなければならないので、そういう段階で、ある程度固まっていく分野もあるかと思っておりますので、もう少し経緯を見守っていただければありがたいなと思っております。

三神委員 期待しましょう。そうしないとだめです。

小林会長 アクションプランとか、具体的施策とか、それらの全体の構図が最初からはっきり見えていれば、まだ良いのですが、これはビジョンだから、そんなに具体的な個別の施策にまで触れているわけではないわけです。ビジョンは、基本的な骨格というか方向性を示すもので、上位規範に相当するわけです。その考え方に基づいて個別の色々なプランが出てくるわけです。たぶん皆さん、それくらいの重みを持っているのだらうなと思って、この審議会に出ているらっしゃるわけですね。だから、当然、この産業振興ビジョンに基づいて観光振興であるとか、個別の中小企業の振興策だとかいろいろ定める必要があ

るだろうと認識するのが、普通だろうと思います。その辺りが、はっきり見えていないような印象があるで、その点をちゃんと、ご理解いただければいいのではないのでしょうか。

清水委員 今、三神委員がおっしゃったのは、今会長がおっしゃられたとおりなのですが、たぶん、われわれが討議していることを、どのように検証していくかという部分が希薄なのではないかというご指摘ではなかったでしょうか。今応援するよとおっしゃったのですが、上申するとういこともあるのでしょうかけれども、われわれ前回の時もこのぐらいまで議論を重ねてきた、でも局長が変わった時にもう一度この辺りまで下がった、実は、お叱り受けるかもしれませんが、下がったような気がしました。そこからまた、こう立ち上がってきておりますので、われわれがいま議論していることを、あともう1年、本当はずっといていただきたいのですが、これができるまでは、やはりきちんと事業継承、これも一つの事業だとも思うのですけれども、どういう形で事業継承して下さるか、また局長が替わったのでガラガラボンではなくて、われわれの議論がきちんと継続していくような形になるようにする必要があります、今きっと三神委員がご懸念されているのは、そこなのではないのでしょうか。もう一度教えていただけますか。

三神委員 中小企業振興基本条例の中に市役所の役目というのが、ちゃんと書いてあるんです。あのような基本的な条例でさえ書いてあるわけですよ。こういうものに、市役所の役目はこうだよというものが表現されてなかったら、継承していかないと思うのです。やはり必要だと思うのですよ。私はあなたがたを信用していますが、次の人はわからないですから。札幌市ばかりでなくて、他の自治体でも例がありますが、色々なところで同友会が活動していますが、体制が変わってしまうと、もう一度説明し直さなければならぬのです。そこが問題になっているのです。帯広の振興条例が最初に随分脚光を浴びて作ったのですが、それが、いま皆さん替わってしまい、もう1回やり直しだという話になったのです。そういうことは、皆さんにはわからないのです。われわれから見るとわかってしまうのです。われわれからすると面白くないというか、進まないことに苛立ちを感じます。皆さんが変わると、基本はあるのですが、実際の施策ではやり直しという感じになると思います。このようなことがありますので、是非1項目必ずこの中に入れてほしいなと切望します。それから、これからのわれわれの審議会の中でも、たいへん重要な要素だということです。

池田委員 わたしは元々、この委員を引き受ける時に思ったことがありまして、それは、民間が今回行政とのかかわりを持つということになったわけなので、自分達の役割は何かといった時に、私は、アクションプランを作りやすいようなビジョンを作ることが役目だというふうに思っておりました。ですから、もし、行政の方がまだ作りづらいのならば、この議案は、まだまだ的を射ないといえますか、レベルが少し低いものなのかなと思っております。私のスタンスはそうです。アクションプランを作れとかではなくて、作りやすい土壌を、民間の発想で作る。それに対して行政が、行政の思うことをぶつけてくる。そして積み重なってくるというふうに私は思っていますので、是非そういう議論にしていた

だと、私の気持ちとしてはありがたいなと思っておりますし、それから、できた時には是非いい形のアクションプランを作っていただきたいなというふうにも思います。それから、組織は云々と言っても現実には現実ですから、それを踏まえた仕組みを作っていくということに議論を向けていってもらえるとありがたいということです。

私は、一つだけ札幌らしいものって何かなというふうに思った時に、やはり、先ほど平野さんがおっしゃったように、ミニ国家なのです。ですから、そこで私が思っているのは、人ということだと思のです。愛着を持つ人がここにどれだけいていただけるか、そのことが産業の活性化につながると思っています。ですから今回環境という言葉が出たのは非常にいいなと思のです。環境という言葉が一番下に書いてあるITとかコンテンツもいいのですが、プラス、例えば芸術産業ですとか、昔であれば戯言のような、そんな芸術が経済と関係ないという時代もありましたけど、今は芸術産業が立派な産業と結び付いていくと思います。同じようにスポーツ産業、そういった札幌市が力を入れられるものを、もう少し表現すると札幌らしい産業ビジョンができると思います。それができれば、アクションプランも作りやすくなると感じています。行政の方は色々な調整もあるでしょうし、その調整のために時間がかかります。それも踏まえて私たちは議論していかなければならないと感じています。

小林会長 はい、どうぞ。

小仲委員 実際に行政と実態経済、我々経済人との格差が有るのではないのでしょうか。格差というか距離感・温度差がありすぎるのではないかと思います。それは、先ほど三箇委員も三神委員もおっしゃっていましたが、本当に部局間できちんと統制がとれているのか、同じ思いで産業ビジョンを捉えているのか、ということについて非常に疑問視しています。

そこが無いから、結局こういう3つのエンジンを作っても、北海道の一次産業を活かした6次産業とせつかく言っておきながら、そこに留まっている。私どもがものづくりに一生懸命励んでも、経済人が、経済、産業を担っている我々が一生懸命ものづくりに対応しても、行政は政策の中でそれを組み入れない、活用しない、税金は使うけれども実態としては使われていない。そういった事の検証が果たして出来ているのかどうか。行政と我々経済者との間の温度差というか、距離があることが、明確なビジョンを表せない、出せない一つの大きな要因となっているのだと思います。

その辺を、もう少しきちんと整理して、ビジョンの中に組み入れられなければ、いくら中小企業振興条例を作って中小企業の発展を目指すといっても、行政と企業者が一体にならないければ、「絵に描いた餅」的なビジョン、具体化されないビジョンでしかないのではないのでしょうか。そこをどのようにお考えでしょうか。

小林会長 事務局から今の質問にお答えになりますか。大事なことですが、ここは行政施策の在り方を論じている場では無い訳ですよ。

小仲委員 しかし、だからこそビジョンがきちんと明確にならない。みなさんがアクシ

ョンプランとおっしゃるけれども、アクションプランがないビジョンだと実体経済にいる我々経済人にとってこれはただの文章でしかないのです。これが、血が通った、心の通った産業ビジョンなのではないでしょうか。

小林会長 そうしているつもりですが、事務局から何かお答えできればお願いします。

事務局（渡辺産業振興部長） 少し抽象的な話になるかもしれませんが、まずは三神委員の先ほどの話で札幌市の役割と伺いますか、その話につきましては、ご指摘のとおり、まず我々が大きな軸で捉えているのは、審議会の皆さんが作っていただいた中小企業振興条例です。この精神をきちんと踏襲をして、それぞれ行政・企業の方々の役割を見極めながらこの産業振興ビジョンをアクションプランにつなげて行くのが大事だと認識しております。ただ、いろいろな施策があるなかで、それぞれの行政のかかわり方でありますとか、あるいは企業のかかわり方ですとか、施策によって主体がどこになるかというのも変わってくると思うのです。ですから、そういった意味で、先ほど冒頭に角田課長が申し上げましたように、中小企業振興条例の精神を踏襲している、引き継いでいるということでご理解いただきたいと思います。

それから、これまでお話が出ているのは、産業振興ビジョンの精神がきちんと10年間踏襲されるかというお話だと思うのですが、その件につきましても先ほどお話ししましたとおり、市としてのオーソライズは、市民の皆さんのパブリックコメントをいただきながら、あるいは議会の審議をいただきながら、企画調整会議など庁内会議でまとめていくということだと思います。そういったオーソライズされたものを、我々としてはしっかり組織として担っていくということで、これは人が替わっても組織で受け継いでいくということで、ご理解いただければと思っております。それから先ほど、小仲委員の方から出ていました関係につきましては、おそらく、個別の具体的な話をすれば、ものづくり支援のことかと思いますが。

小仲委員 いいえ。それだけではありません。全体として本当に部局間できちんと踏襲をされていて、行政として実行されるべく姿になっているかどうかということです。結局は部局間のたらい回しだとか、「知っている」「知らない」、観光にしても農業にしても部局が変わってしまうとすべてそうになってしまう。三神さんがおっしゃるとおり、部局単位ではなく札幌市なのです。局長がお替わりになろうとどうであろうと、札幌市としてどうするかということだと思うのです。きちんと踏襲していけるのか、企画調整会議を行っても、各局長から下ろして横の連携がきちんと取れているか、そこら辺がまず出来ていないから、結局ビジョンの中においても情熱だとかそういった形が見えてこない。行政と民間とのきちんとしたコラボレーションが無い限りは、ビジョンはビジョンでしかないですよ。本当に10年間踏襲された中で札幌市が活性化して産業をどのように発展させていくのかということが見えてこない。そこが行政自体の中においても明白でない。これが、皆様が我々民間に出向かれた時も、あるいは民間と歩調を合わせて何かをやっていこうとしても、明確に強く訴えられない要因ではないかと私は思います。

事務局（井上経済局長） いろいろとご意見をいただいておりますが、今のご意見は産業振興ビジョンのあり方というより、札幌市の行政組織体としてのあり方についてのご批判だろうと思って受け止めてございますが。

小仲委員 批判ではないのですよ。

事務局（井上経済局長） この産業振興ビジョンが出来上がって、今後このビジョンにぶら下がるアクションプランが出来上がって、再度そのアクションプランに基づいて具体的な施策を札幌市が実行していく段階において、今小仲さんがおっしゃったような、札幌市がこのビジョンを踏まえて横の連携をとりながら具体的な施策を進めていってくださいよというご意見だと思っています。

それが出来なければ産業振興ビジョンが出来上がらないという話ではないと思っております。おっしゃっていることは理解できますし、なるべく我々の組織体もそうなるように努力していかなければならないと思っておりますが、そこは今後の課題といえますか、そのように受け止めさせていただきます。大事なことだとは思いますが、そのところが出来ないからという議論と、産業振興ビジョンにおいて産業振興の方向性を示すということは関係ないかなと思っております。

小仲委員 この審議会は、産業振興ビジョンという器を気にしすぎていると思えます。器に何を入れるのかという目的が明確でないから、手法としてのアクションプランに行き着かないのだと思うのです。批判しているつもりはないです。目的が明確でない、ビジョン作り自体が目的になっている。10年ビジョンといっても3年5年で大きく世界が変わるなかで、目的を見せないと中身の整理もしようがないので、行政としても各部署とお話になった上で進めていただきたいということです。それが無駄な話だということであれば、私はこの審議会にいない必要がないと思えます。

卸小売が載っていないという話がありましたが建設業も載っていません。特殊な寒冷地技術を有する建設業も北海道、日本を支えている業態だと思います。10年間に何をするかという目的がない。それを民間と行政が一緒になっていかないと産業はうまくいかない。結局札幌で何をやるのか、観光だ、環境だと言いながら実態をつかんでいない。それぞれがバラバラな動きをしてしまう。そこに大きな問題があると思えます。ビジョンを作るのであればそこを見ないと、実態の産業振興につながらないと私は考えています。これが、地べたをはいずり回って仕事をしている者の実感です。それが議論にならないということであれば、今後の対策なりビジョン作りに対する思いをいただきたいというお願いをして、私からのお話を終わります。

三神委員 何らかの方法でこの気持ちを審議会として上に伝える方法を考えなくてはいけないと思えます。札幌市の局長は並列ですから、副市長か市長に言わないと超えられない。例えば、答申をするときに、まとめの我々の意見としてそういう思いを入れる。例えばアクションプランについて明記できなければ、アクションプランについて関係部署がこういうところがあって、それを実行段階に進めない限りは活かされたものになりませんと

いう審議会の意見として添付するという形をとるとか。それが上に伝わればいいことで、審議会としてこれを進めるということであれば通るのかもしれない。組織的には、局長に全部やれという話ができないのは、どこの企業でも同じだと思います。局長、部長が責任をとりますという話にはできない。そうしてはどうかと思います。

小林会長 市に提示する方法を考えるとということですね。具体化していく段階で、活用に努力して欲しいという文言を付加する。この素案の文言上で、どこにどう入れるかという話にはなりにくいと思いますが。活かし方、具体化の問題であります。

古内委員 初めて審議会委員というものになり、毎回ドキドキしながら参加していますが、みなさん発言に慣れていらっしゃいますね。私は、商店街で毎日お店を守っているおかみさんの代表といいますが、商店街振興組合の札幌市の部長をさせていただいている関係でこの場に呼んでいただいているのだと思います。

今回とても嬉しかったのは、私がスポーツ店を経営していることでもあります。ビジョンの中で商店街のことも具体的に書かれていて、我々が何をすべきか札幌市の方が考えてくれていると感じられたことです。人を育成するにはどのような方法で行うのか、商店街の関係者の人として札幌市に相談できるのだという安心感を覚えます。スポーツの部分でも、かつて札幌市内に芳賀スキーというメーカーがあったという話を覚えて下さっていたようです。

地域子ども達を相手に商売をさせていただいていますが、せっかく札幌に転勤してきたのに、スキー授業がないからスキー学校にも行かないという子どもが増えています。学校が5日制になってからスキー授業が減りました。こういった問題について、教育委員会とお話をさせていただく機会があればいいなと思っています。

何か市の方に相談したいとき、どこかとお話できるような関係窓口があって、話ができる体制ができていればありがたいです。難しいこともたくさんありましたが、ビジョンということで、私も地域のビジョン作りにかかわったことがあります。本当に住民がこんな形にしたいということも、途中でいろいろなことが変わりますよね。このビジョンについても、時々検証していくということも書いてありました。ビジョンの成果を正確に評価する必要があるときは計画的な進行管理を行うと書かれてあります。今は、始まりだけでも、世の中が変わった時に見直していくのかなと受け止めています。こういう理解でよろしかったでしょうか。

小林会長 最終的に札幌市産業振興ビジョンが策定されるまで、まだ段階があるわけです。現在は素案について議論しているところです。先ほど議論になったことは、産業振興ビジョンが最終的に確定する段階において、これをいかにして活用していくのかということが重要だということだと思います。

今はまず、おおよその方向付けを示そうではないかということで議論しているわけです。素案を審議していただいているわけです。皆さんには普段から考えていらっしゃるいろいろな思いもあるとは思いますが、本日のところは産業振興ビジョンの素案についてこれを

最終的に確定していくまでの段階です。これを是非入れておかないといけないといったご意見を伺って素案を確定する、それから最終的な産業振興ビジョンを策定するという手順で来ていますので、今一度頭の整理をして議論いただければと思います。他にご意見はございますか。

三神委員 この文章自体は名文で網羅されているが、逆に難しい単語も入っています。用語解説が最後に付いていますが、これをページの下に入れて見やすくすることができないでしょうか。最近では外国語をカタカナで使った方が表現しやすい場合もあるのですが、一般市民全員が見ることを考えると、見やすく、わかりやすい形でお示しいただければと思います。

小林会長 注釈の入れ方の話ですね。出てきたページの下に入れた方がわかりやすいでしょうね。

三箇委員 例えばP33の3番で、産学官連携を促進するなど豊富なネットワークと書いてありますが、世界に羽ばたく企業の育成のような話を入れていくのであれば、これに金融の関係が入っていないといけないのではないのでしょうか。経済はお金でまわっているわけですから、産学官連携プラス金融ということをつけ加えてはどうかという感じを受けています。

それから、P40の基本施策の4番のところに女性の就業率の向上を図るため云々という部分がありますが、下の方に豊富な経験、知識、技能を有する高齢者の雇用を創出しますということが書かれてあります。高齢者でも収入がほしいということではなくて、ボランティア活動ですとか、世の中に少しでも役に立ちたいということも価値があることだと思います。雇用ということであれば、働いてお金をもらう感覚があるわけですが、お金以外の部分もあるかと思います。

それと、44ページの市民及び環境活動云々という部分がありますが、環境の問題と関連しますが、札幌市はゴミの分別収集とかいろいろなことをやっていますよね。それに関わることも文言の中に入れていってはどうかと考えています。以上です。

小林会長 ほかにどうでしょうか。先ほども話にありましたが、札幌市はミニ国家ともいえる大きい都市です。行政の構造も非常に大きくて、いろいろな部局がそれぞれにいろいろなビジョンをつくっているわけです。その中の位置づけとして、経済問題の全てをカバーするわけではないですから、おそらく特に産業振興にとってポイントになる重要な論点を積極的に浮き彫りにしようということだと思います。流通、物流は必ず問題になる。極めてウェートが高いのは建設業で、建設業は非常にやっかいな問題を抱えている。

それら全てを広範に議論しているわけではないと思います。そこで、ビジョン作成の基本スタンスとありますが、こういうところからスタートしたという、ちょっとした記述があれば話がわかりやすいかなという気がします。金融の問題は経済を考えることは絶対に不可欠ですが、行政施策を実行する上で予算がどれだけ必要だという話は全くしていないわけですね。

三箇委員 私がお話ししているのは、お金の貸し借りをする金融機関という意味ではなくて、今日も北洋銀行さんがいらしていますが、企業のお手伝いとしていろいろなことをしているということを記述されてはどうかということです。新しい取引先とのコネクションですと、そういった活動について入れておく必要があるのではないのでしょうか。

小林会長 それについて事務局はいかがでしょう。

事務局（渡辺産業振興部長）三箇委員のおっしゃった金融機関のかかわり方について、前回の審議会でも話が出ていたかと思いますが、あらゆる場面で金融機関との連携を深めているいろいろな施策の展開をしたいと考えておりますので、そういった観点と言うことであれば書き込み方もあろうかと思えます。

小林会長 まだ工夫して修正していく余地はございますから、他にご意見はございますか。

清水委員 もう審議会も4回目ですので、間に合わないかもしれませんが、今日も北洋銀行さんがいらして、道銀さんと取り組み方が大きく違うと思っています。道銀さんはアグリ関係などを行っていますよね。北洋さん、道銀さん、信金さんの3つの金融機関からは、パブリックコメントをいただけたらと思います。お手伝いというより、中小企業を指導していただいているという立場からです。経済局としてご検討いただければ幸いです。

小林会長 他にございませんか。それでは皆様から大変たくさんの意見をいただきましたが、事務局としては素案確定の際の検討に活かしていただきたいと思えます。今後のスケジュールと進め方について事務局からご説明をいただきたいと思えます。

事務局（渡辺産業振興部長）今後のスケジュールについてご説明致します。最終的な素案確定につきましては、審議委員の皆様のご了解をいただきましてから小林会長に一任いただければと思えます。その後庁内における全庁的な企画調整会議を経て、市長までの確認をとり、市議会で議論いただこうと考えております。さらにパブリックコメントを実施し、広く市民の皆様の意見を頂戴したいと考えています。

パブリックコメントは、6～7月を予定しています。審議員の皆様にはパブリックコメントに公開する素案をお送りさせていただきたいと思えます。最終的に市民の皆様のご意見を反映させた9月頃を目処に札幌市産業振興ビジョンを策定したいと考えています。

小林会長 ありがとうございます。今、ご説明いただいた今後のスケジュールについて何かご意見はございますか。

三神委員 ここで議論されたことがビジョンの中にどれだけ反映されたかを、審議会委員としてみなさん確認したいと思えます。それがないうまに庁内調整に入るというのはどうなのでしょう。みなさんどうですか。もう一回審議会があるということですが、いつですか。

事務局（渡辺産業振興部長）今の段階では、審議会の皆様にご覧いただく場面としてはパブリックコメントの実施前に公開前のものをお示ししたい。庁内のいろいろな議論を経

た上での素案です。最終的には産業振興ビジョン素案を修正し、パブリックコメントの公開前に審議会を開催したいと考えています。

小林会長 庁内調整の前に審議会を開催した方がいいというお考えですね。

三神委員 パブリックコメント前であればほぼ固まっていますよね。一般市民からの意見を問うということですよね。その前に審議会を行うといっても、パブリックコメントにかけるビジョンの要旨を見るだけの審議会で、修正する時間がないのであれば審議会を開催しないほうがいい。パブリックコメントを公表する前に手直しするならもう少し前に集まらないと無駄になりませんか。資料を送ってもらっても、ただ見るだけでは意味がないですよね。

事務局（渡辺産業振興部長）今のお話を踏まえまして、スケジュールがタイトですが、できれば庁内会議前に審議会を開催し、再度お諮りしたいと思いますがいかがでしょうか。

小林会長 これだけいろいろな議論が出たわけですから、多くの市民の意見をいただくパブリックコメントの前に、審議会の議論を踏まえた素案を見せて欲しいということですね。審議会で意見が出たら修正もありえるという前提で進めていく。個別に伺うなど、やり方はいろいろあると思いますので、委員の皆さんの意見をできるだけ活かす形で進めていただければと思います。そういう形でよろしいでしょうか（委員同意）。ありがとうございました。

そういうスケジュールで素案の最終確定に持っていきたいと思いますが、最終段階についてはご一任いただけますか。途中の段階、過程を経て、これでいきましょうということをお願いできますでしょうか（委員同意）。

今日はたくさんの議論が出ましたが、議論の結果を活かすように事務局の方で作業を進めていただきたいと思います。

さて、続きまして前々回の審議会で諮問を受けて検討会を設置しました「ものづくり振興戦略」について、検討会の経過報告を座長の平本委員からお願いしたいと思います。

平本委員 それではご報告申し上げます。「ものづくり振興戦略」第1回検討会は前回の審議会を受けまして1月25日に開催いたしました。委員は、池田委員、三箇委員、平野委員、松本委員、山下委員、平本の6名でございます。最初は検討会で何をどう検討すれば良いのかということについて、なかなかベクトルが合っていませんでしたので、第1回検討会は主として、まず我々の検討会が何をすべきなのかということについてのベクトル合わせを行いまして、2回目以降具体的なアクションプランの策定に向けて、どういうステップを踏むべきかについての合意を形成したという次第です。具体的な中身につきましては、事務局のものづくり支援担当の平木課長にお願いします。

事務局（平木ものづくり支援担当課長）ものづくり支援担当課長の平木です。よろしく申し上げます。今、平本委員からご説明ありましたように、1回目の検討会は1月に実施しました。お手元に配りました紙でご説明しますが、第1回目の検討会では、（1）（2）のような意見が出ております。

進め方としまして、5年間という戦略の事業期間を考えまして、各業界が現在抱える問題点、ボトルネックを解消するという方向、それから順調に事業を進めている企業は何がポイントになったのかという観点から検討を進めております。今後は、業界の目指す方向性、それから行政が行うべきことを導き出すという方法で進めていくということで第1回目の検討会を終えました。

今事務局では、各業界の方に対してヒアリングを実施しております。今回、産業振興ビジョンが皆さまから、素案ということで概ねご了解を得ましたので、素案に沿ってものづくり振興戦略を作るということになります。66ページの図については、表現について、いろいろご意見をいただきましたが、ものづくりが、産業に対する影響が非常に大きい、それから雇用効果が高いということで、基盤という表現となっております。

これが、どういう形で観光や食や環境につながっていくかということになれば、例えば47ページ図の下にある最初の四角、ここは食の部分ですが、その中に、産学官の連携の強化とか、マッチングとか、そういうことが書いてあります。そのようなものをキーとして各6名の委員の方に議論をいただいて、結びつけていくということになると思います。

同時にものづくりは食や観光、環境の基盤だけではなく、私はものづくりが主役だと思っており、同時にものづくりとものづくりが組むということも当然行っていかなければなりませんので、それが何をキーとして行っていくかというようなことを第2回目で検討していただくということになると思います。

また、バイオ、IT、コンテンツについては、ビジョンの55ページ以降で基本政策というものが書いてあります。10年間を見据えた方向性というものがここで示されておりますので、この方向性に沿った形で、平成23年～27年の5年という期間のものづくり振興戦略がどうあるべきかということをご議論いただくということになります。

第2回の検討会については、4月14日に、お忙しい中申し訳ございませんが、委員の方にお集まりいただき、その場で大まかな骨子案をお示しして議論いただきたいと考えております。以上であります。

平本委員 ありがとうございます。この進め方のところで平木課長からご説明していただいた通り、できるだけ札幌あるいは道内の企業で上手くいっているところが、どういう要因で上手くいっているのかという、いわゆるケーススタディをきちんと行った上で、実効性が少しでもあるアクションプランとして提示できるよう、検討会で議論を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

小林会長 はい、ありがとうございます。それでは、ただ今説明がありました内容につきまして、何かご意見・ご質問などございませんでしょうか。

池田委員 最初に検討会を開催するにあたって、裾野が広いということで、どうまとめて、どこから着手するかについて悩まれたと聞きましたが、その経緯をもう少しご説明いただけますか。

平本委員 前回1月25日に検討会を実施した際には、今回提出されたビジョンがない状

態でした。前回の審議会がどちらかといえば、わりと大枠だけの議論を基にして検討会があるというタイミングであったと思いますが、検討会として一体なにをどこまでやればいいのかよく分かっておらず、それからものづくりというときに、いくつかの産業分野が提示されていたのですが、その中で有機的な関連性もあまり分からず、最初に一体我々は何をどういうふうに議論してどういうゴールにたどりつければいいのか少し苦労をしました。

一つはタイミングの問題、もう一つは3つのエンジン、前回と今回で、環境というものが入っているのですが、我々がものづくりをどういう位置づけでとらえればいいのかについても共有できていない状態でスタートしました。

前回の議論と今回の議論で、66ページの図の書き方については、いろいろ議論があると思いますし、改良が必要であると私も思っているのですが、食と観光と環境の全てにかかわるまさに高付加価値化、付加価値を高めるための基盤として、製造業、バイオ、IT、コンテンツという産業にかかっているというところまで、ほぼ委員会のメンバーで共有できたといえます。また、先ほど申し上げましたように、事務局の方に優良企業のヒアリングを行っていただいて、実態が検討会メンバーの間では共有されております。こういう動き方をすると、良いパフォーマンスがでるなというある程度のイメージがつかめると思います。ヒアリングを進めていただくと同時に、我々はできるだけ絵に描いた餅にならないような形でのアクションプランができればいいなと思っております。

小林会長 よろしいでしょうか。

三神委員 今、資料を拝見しまして、製造業の全般を対象にするというお話でしたが、特に6分野ということで、さきほどの図形のところには製造業というように記載していませんよね。製造業のところには、食品、印刷、金属機械という3つの分野になるのですか。後はないのでしょうか。それともこの3つの分野に集中して絞りこもうとしておられるのでしょうか。

事務局（平木ものづくり支援担当課長）まず、製造業とは一般的になかなか議論しにくいというご意見がありまして、札幌の中で大きな比重を占める食品、印刷、金属機械というのはまず具体的な業種として想定して、そこで議論・ヒアリングを進めていこうという話であったと思います。また同時にこの3つが札幌の製造業の中で大きな割合を占めますので、食品、印刷、金属機械、IT、バイオ、コンテンツを含めた6つを重点産業として政策を書いていこうという方向になっています。

小林会長 よろしいですか。

三神委員 食品製造業は、札幌も北海道も多いですよ。これ以上伸びるのでしょうか。伸ばせる余地があるだろうとは思いますが、他の製造業が少なくて困っているのではないかと思うのですが。食品製造業は断トツですよ。

事務局（平木ものづくり支援担当課長）食品については、売上・従業員数ともに30%以上のシェアです。食品製造業を伸ばしていけるかというご質問ですが、ビジョンの中でも

エンジンと書いておりますし、当然伸ばしていく必要があると考えております。ただ、伸ばし方が売上なのか純利益なのかという問題はもちろんあると思いますが、伸ばしていき余地があるということで理解しています。同時に、ビジョンでも触れているように、これまで札幌の経済成長を支えた人口増、公共工事が今後明白に減少していくなかでどう対応していくか、言い方は悪いですがこれまでの人口増と公共工事に寄りかかっていた、例えば金属機械などをどうしていくかということの議論をしていただければと思っています。

小林会長 よろしいですか。

三神委員 お任せします。

小林会長 66 ページの図で製造業、IT、バイオ、コンテンツと横並びになっていますが、製造業というのは何を対象にしているのか、あまり明確でない部分もあるように思えます。札幌や北海道の製造業は、まず食品が頭に浮かぶのですが、そういうイメージでまず製造業と書いて、その付加価値を高める上で役立つであろう新しい産業としてのIT、バイオ、コンテンツという並びなのでしょうね。

大嶋委員 食品等でも、加工等で課題はまだあると思います。そういう意味でも食品を外すわけにはいかないでしょうね。

小林会長 今日の最初の説明にもありましたように辛子明太子のような高付加価値化というのが非常に大事であることが強調されておりました。もう一つ、地域間の域際取引において移出超過なのは食品なわけで、これをさらに強化していかないといけない意味合いも含まれています。強化するのに役立つのがIT、バイオ、コンテンツということでしょうね。全体の構図としてはそういう位置づけだと思います。図の表示の仕方には工夫の余地があるかと思いますが、内容的にはそういったお話かと思っています。

他にないでしょうか。それではそろそろ予定の時間が近づいてまいりましたので、本日の審議会につきましては、以上とさせていただきたいと思います。このあと進行を事務局にお返しいたします。

事務局（井上経済局長） ありがとうございます。今日の審議会に出た議論をベースに最終的な素案を作ってまいりたいと思います。ご指摘いただきましたように、今日いただいたご意見につきましては、事務局で素案を作成の上、もしも審議会の時間がなければ各委員に再度ご意見を伺ってまとめていきたいと思っています。今回はほぼ最終型になったかと思っています。

いろいろご議論いただきました感想でございますが、やはり札幌市の産業振興に関する民間の事業者の皆様との議論する場があまりなかったと思っております。今回議論の場を設けられたことは意義があったと思いますし、今後も継続していく必要があると強く感じたところでございます。

もう一点、この産業振興ビジョンがベースになり、今後さまざまなアクションプランが作られ、そのアクションプランをもとにさまざまな施策が市民に対して説明責任、アカウントビリティを持って示されていくことが望ましいと考えております。人事の話もござい

ましたが、是非皆様と志を同じくして今後一緒に取り組んでまいりたいと思います。

最後に、本当にさまざまな議論をいただきましたことに感謝いたします。そして、今回の議論も踏まえまして、しっかりしたビジョンを作るということをお約束いたしましてご挨拶に代えさせていただきます。

以上